Proposal 2　–巡り × ○○–

巡り × 水

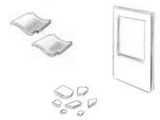
水は、海のから雲となり雨となって地上に降りてくる。そして、地中にゆっくりと浸透し、また海に戻る。しかし、現在の地表面はコンクリートで固められ水がうまく地中に浸透できずにいる。敷地全体が水の器のように水をゆっくり浸透させるために、蛇籠や側溝、石敷き、植林などの方法で雨水を分散させる仕組みを散りばめる。

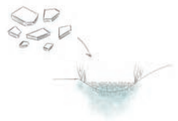
巡り × 空気

現代の住宅は四方壁で覆われた住宅が基本である。しかし、大地に息吹く風を遮るものでもある。空き家の改修では、一階部分の壁を全て取り除き、風の通り道をつくる。一階部分は木造軸組のみとなるため、芯にコンクリートを用いた蛇籠壁と軸組を固定し強固なものとする。

巡り × 素材

空き家の利活用は、すべてを取り壊すのではなく、使える素材は最大限に活用できるようにする。例えば、建具や瓦、基礎のコンクリートなど。





現在の地表を改善するにあたり、コンクリートを砕いたガラが発生する。そのガラを蛇籠や側溝に再利用する。

巡り × 季節

皿井・皿井新出水は、夏季の灌漑期に湧出量が増加し、冬季の非灌漑期には地下水位の低下により枯れてしまう。そのため、水の水位の変化と植えた木々の変化によって季節の移りかわりをうかがえる。

巡り × ヒト

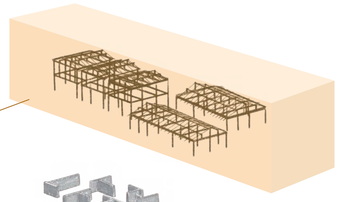
図書室と子ども食堂は子どもを対象とした建築物になるが、子どもを中心として多世代が関わる空間を目指す。子ども食堂では地域の人々の協力が必要不可欠であり、この場所が地域の交流の場の中心となる。

巡り × 空間

二つの出水が細い水路でつながり、田畑へつながる水路へと湧水を導く。この場所を、水を媒体とした循環する環境帯へと改変することが目的である。天からの恵みである雨水、大地からの湧水、この二つの恵みを自然素材の石・木によるささやかな所作によって、豊かな水空間へと導く。

ふたつの視点

人間空間（ 空き家 ）、自然空間（ 水の循環 ）、ふたつの視点での「滞留」を改善することで、敷地全体の大きな循環に繋げていく。

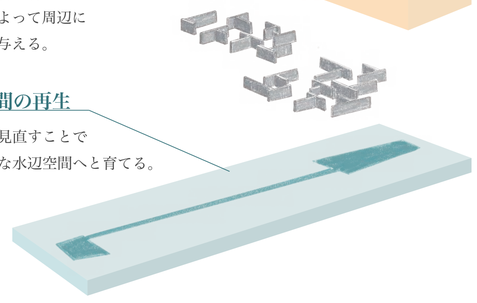


人間空間の再生

新たな利用者が現れることによって周辺に活気を与える。

自然空間の再生

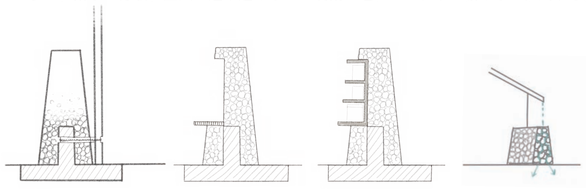
循環を見直すことで健やかな水辺空間へと育てる。



仕組み

○蛇籠

建物に付属する蛇籠にはコンクリート基礎を用いて軸組を固定する。
また、雨水の分散、空気の通り道としての役割の他、ベンチや本棚として活用する。



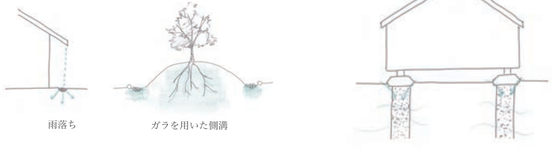
蛇籠と軸組　蛇籠とベンチ　蛇籠と本棚　雨水の分散

○側溝

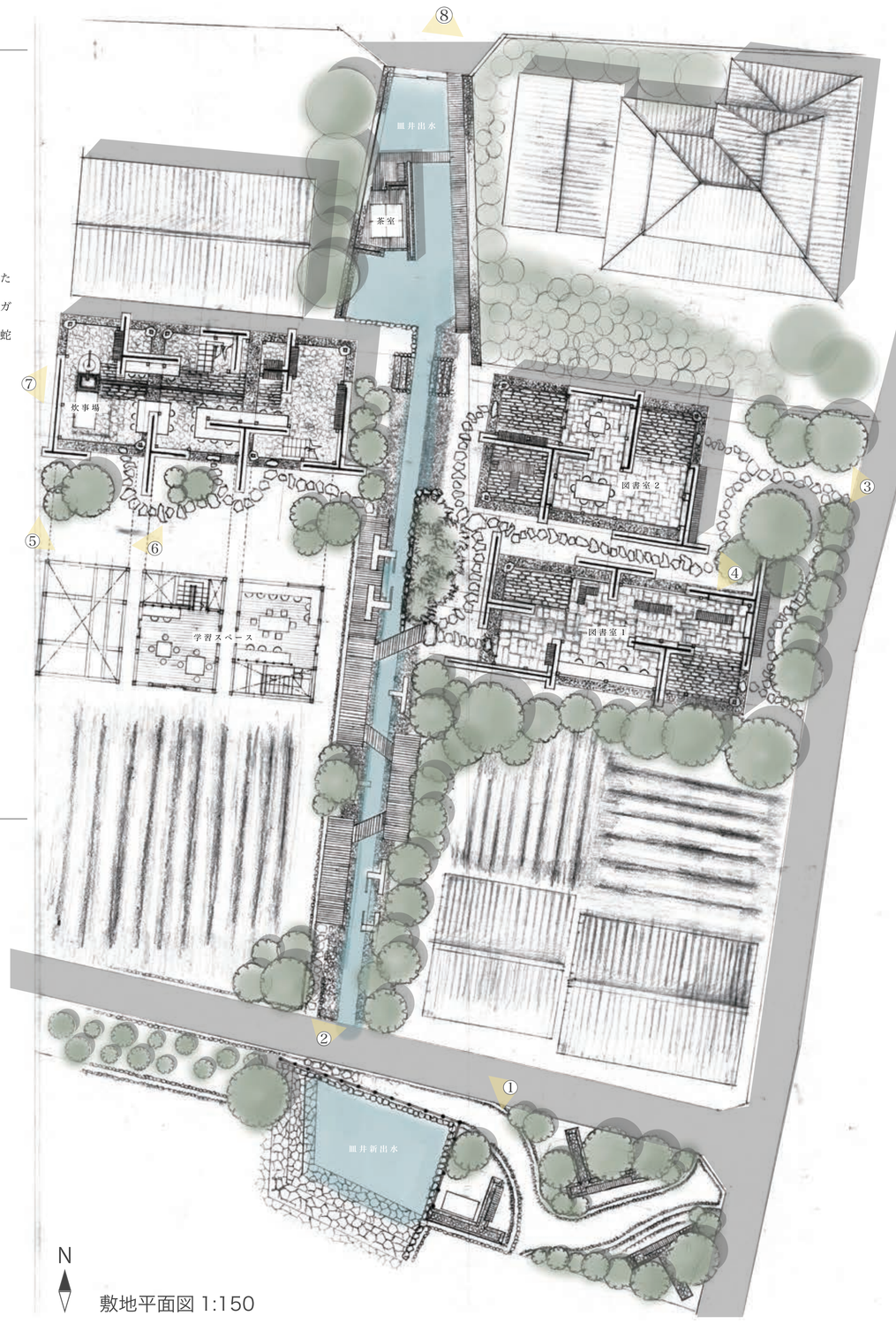
雨落ちや段差のある部分には側溝を設け、雨水の分散を促す。

○砕石杭

空き家の杭は「砕石杭」を用いて、地盤改良を行い、土中環境を向上させる。

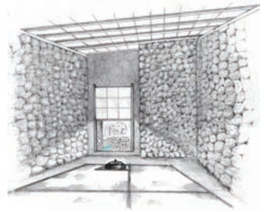


雨落ち　ガラを用いた側溝



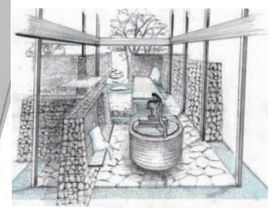
N

敷地平面図 1:150



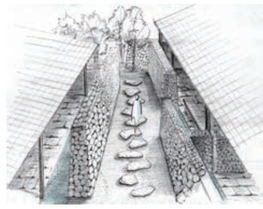
茶室内観

北側の皿井出水の水上に浮かぶ茶室。自分が歩いてきた道を望み、お茶をする。ハの字に配置した蛇籠の壁面をそのまま内壁とする。空気の通り道のある蛇籠壁が普段体験できないような空間にいざなう。水路に向かって開いた開口は上下する障子によって光の調節を行う。



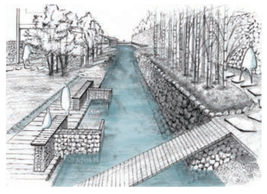
子ども食堂の台所

３棟が並ぶ子ども食堂は、一番奥の棟に台所がある。台所の水は井戸から地下水を引き利用する。井戸のポンプからあふれた水は石畳へと浸透し再び地へ戻る。蛇籠の壁面を掘り込み、ベンチを設け、カウンターテーブルを設置するなど多様な活用を行う。



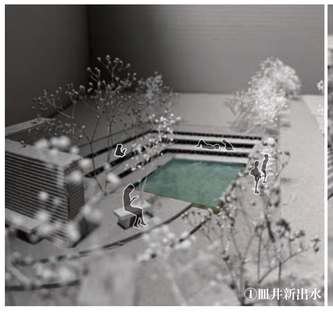
図書室路地

図書室は、児童書の他、出水などの地域資料を取り扱い、子ども、大人問わず集まることができる図書室となっている。本棚は蛇籠壁にはめ込み、本棚も空間に溶け込む形とした。蛇籠壁に挟まれた路地は、風の循環を感じることができる場所である。

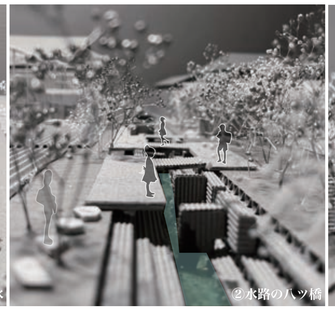


水路の親水空間

八ツ橋を渡り終えると図書室に繋がる橋と子ども食堂に繋がる板敷きの道に別れる。水路にも座ることができる小スケールの蛇籠を配置している。蛇籠で囲われた部分は、動植物の観察、畑でとった野菜の泥落としなど親水空間として利用される。

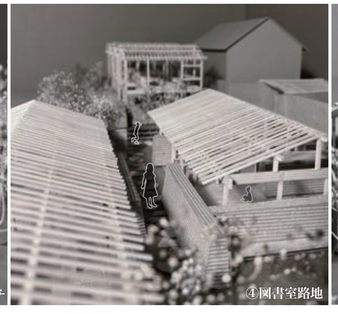


①皿井新出水



②水路の八ツ橋

③図書室アプローチ



④図書室路地

⑤食堂アプローチ

⑥炊事場

⑦食堂

⑧皿井出水